



笠間書院
9,450円(税込)

『紫式部集』 歌の場と表現

廣田 收(ひろた ちか) 著
(大学文学部教授)

国内外において『源氏物語』はつとに有名であるが、紫式部のような人物ですら、その経歴の詳細はほとんど不明である。それゆえ、『紫式部集』という個人家集は、彼女の伝記研究の史料として「利用」されてきた。その扱われ方において、この家集は実に不幸であったといえる。さらに、近代抒情詩的な理解によって、紫式部の歌は稚拙なものと貶められてきた。本書において、私は、彼女の歌が古代和歌として行事や挨拶、贈答などの場において、強く儀礼性を帯び

ること、さらに、この家集がひとつの「作品」として、物語的な話型に基いて構築されたtextであることを論証しようとした。紫式部は、中宮女房として技巧を凝らし彫琢された表現をもって歌うときと、親しい友人には率直に心情を吐露するときとを見事に使い分けている。それでこそ、『源氏物語』において人物の立場と場面に応じた歌を詠み分けたのだ、と。

ともあれ本書は、大学から研究成果刊行補助をいただき、ようやく公刊することができたものであるが、このような地味な研究書を紹介させていただく機会を得たことを心から感謝申し上げたいと思う。併せて入門編『家集の中の「紫式部」』(新典社、四六版、1,800円)も刊行したことを、厚かましいことであるが、付記させていただきたい。

著者より



関西学院大学出版会
4,200円(税込)

西洋中世盛期の 皇帝権と法王権

ハインリヒ三世・グレゴリウス七世・ハインリヒ四世をめぐる

井上雅夫(いのうえ まさお) 著
(大学文学部教授)

西洋史の中でも11世紀後半に起った「カノッサ事件」といえば、西洋史の中で最もよく知られた事件の一つであろうと思います。この事件の主役となったドイツ王のハインリヒ四世とローマ法王のグレゴリウス七世を中心に扱ったのが本書です。もう一人の登場人物であるハインリヒ三世は余り知られてはいませんが、ハインリヒ四世の父であり、この人物も当時のドイツ皇帝権とローマ法王権の関係を考える上で欠かせない重要な存在です。

この3人は、私から見れば、



ミネルヴァ書房
2,940円(税込)

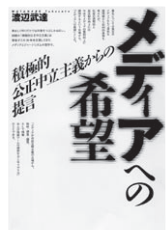
人物で見る 日本の教育

沖田行司(おきた ゆきじ) 著
(大学社会学部教授)

本書は「教育は時代を映す鏡である」との認識の下、江戸時代から現代に至るまでの各時代の教育に影響を持った37人(コラムの7人を含む)を取り上げている。そして「先人が、時代の課題を担いづいかなる人間の理想、または学びと教えるの可能性を追究してきたのか」を解明することにより日本の教育を読み直すことを目的としている。この「人物を通して日本の教育を読み直す」点が本書の第一の特徴である。第二は、前近代の思想が持つ人間形成力や思想自体の可能性を視野に入れた

つ日本の教育を前近代から現代まで通史的に検討する点である。そして第三は構成である。本書は「江戸時代」(第一部)、「幕末・明治時代」(第二部)、「大正・昭和時代」(第三部)の3部構成だが、第二・三部が二つの時代(時期)を一体的に扱うのは、歴史の「連続面」と「非連続面」の双方に焦点を当てなければ各時代の教育思想や教育論の本質を解明できないとの考えに基づく。

人物を手がかりに日本の教育の源流からその流れを辿る本書の試みは有意義であり示唆に富む。例えば新島襄の「私立する精神」と「良心教育」の意義や可能性がそれらを歴史的に位置付けることによりはつきりと浮かび上がるように、個別的教育思想や教育論の歴史的・思想的意義を再確認することにもつながるからである。もちろん壮大なスケールであるこの試みは決して本書で完結するものではない。読者は続刊を期待するであろう。望月詩史(大阪商業大学嘱託講師)



論創社
1,890円(税込)

メディアへの希望 積極的公正中立主義からの 提言

渡辺武達(わたなべ たけさと) 著
(大学社会学部教授)

本書は、産経新聞社発行の日刊紙「サンケイEX」に著者が2007年から隔週に寄稿した「メディアと社会」より、60本を編んだものである。メディアの社会的機能について、政治、外交、歴史、文化など、様々な切り口から鋭く論じている。

目次からいくつか例を挙げると、中東(民主)革命とネットの役割、「活字文化とデジタルの共生」、「震災・原発事故(想定外)の社会力学的意味」、「若泉敬の生き様と沖縄核密約」、「NHK大河ドラマのテーマ選定」、「権力者の奢りと情報操作」など、広い分野が網羅されている。多

一般にかなり誤解されている人物です。ハインリヒ四世とグレゴリウス七世は、カノッサ事件という一見劇的な対決の中で、ともすれば対立的敵対的な面からのみ見られがちですが、両者は意外と本来は協調を求める共通点をもっていました。特にハインリヒ四世など、法王との対立の中で、反教會的不信心な人物のようにも見られますが、実際は全く正反對の面をもっていました。逆に父親のハインリヒ三世は、教會改革に熱心な「敬虔な王」とされていますが、この「敬虔」という言葉から想像される姿からは、一見矛盾するような行動や性格がしばしば見られる人物でもありました。

本書は以前に発表した論文をまとめただけのものですが、我が国で一般に知られている西洋中世史像とは、かなり違った面を3人の人物を通して描いたつもりです。また本書の西洋史像は、我が国で時に見られる理想化された像とも違いますので、御笑覧下されば幸いです。著者より

岐に渡る主題の中で基盤として貫かれている哲学は、「積極的公正中立主義」である。これは著者が主張してきた「メディアが市民主権の立場から、取材・調査・編集、そして情報および情報ツールの提供をおこなうやり方」のことであり、提供される情報が市民、ひいては人類の利益や幸せを形成するという考えから、メディア業界やジャーナリストへの提言、社会問題解決へのアプローチが明快に述べられている。

特別収録として、ベトナム戦争報道でピューリッツァー賞を受賞したジャーナリスト、デイヴィッド・ハルバースタム氏との対談も掲載されており、メディア業界を志す人の必読書でもある。

情報化社会といわれて久しいが、良質な情報が十分に流通せず、混乱を続ける日本。社会を読み解く能力を養う書として、ジャーナリストや学生のみならず、一般の読者にも一読を強く勧めたい。

保野裕美(たけの ひろみ) 著
(天学院社会学部研究科博士課程後期)



玉川大学出版部
2,730円(税込)

学びの質保証戦略

山田礼子(大学社会学部教授) 著

グローバル社会においては、知識基盤社会が基本となり、知識基盤社会に対応できるような人材を育成することが世界の高等教育の課題となっている。そのためには、研究面における競争も激化し、世界の高等教育機関はワールドクラスの大学を目指すことになる。また、留学生を獲得するには大学院のみならず、学士課程教育を魅力的に構造化することも不可欠となる。さらには、学士課程教育の結果としての学習成果も求められる。現在、世界の多くの国々の高等教育に共通していることは、高

等教育の国際化と質保証の推進である。つまり、従来は一国あるいは一地域の特性や文化、制度、言語等の枠組みのなかで、制度設計をし、教育のコンテンツも基本的には一国の言語(national language)で提供していたことが、「国際的通用性」を基準に進展していくことが求められるようになった。同時に、いかに学士課程教育の質を保証するかという課題も「国際的通用性」というマジックワードで語られるようになってきているために、世界での共通課題になっている。

本書では、知識基盤社会において、高等教育の質の充実をいかに実質化するかを、アメリカ、イギリス、オーストラリア、アジアの大学のホームページから読み解き、巻末には、政策文書や高等教育関係の文献を読む際の用語解説として利用できる高等教育関係の用語についての説明も加えている。

著者より



見洋書房
3,045円(税込)

ネットワークと中小企業

おおたにしんいち
太田進一(大学商学部教授) 著

本書は、1990年代、2000年代において、日本企業の国際競争力がなぜ低迷したかについて、二つの仮説の設定を行い、それを実証しようとしたものである。第一に、日本全体のIT化への取り組みの遅れ、ネットワーク経済、結合の経済、デジタル経済への移行の遅れ、企業における経営戦略の欠如、ビジネスモデル構築に必ずしも成功していると言えないこと。第二に、中国をはじめとする主として東南アジアへの日系企業による海外進出とブローメン効果、地場資本・華僑・華人資本

による企業成長と「世界の工場」としての役割拡大による日本製品の中高級品市場への浸食と価格の下方硬直化による影響、である。

全体の構成は3部から成る。第1部は、環境変化と中小企業第2部は、ネットワーク化と中小企業経営、第3部は、イノベーションと中小企業経営、である。

キーワードで言えば、次のとおりである。リバース・エンジニアリング、ビジネスモデル、リストラクチャリング、リエンジニアリング、グローバル・コーポラティブ・ヴァーチャル・ネットワーク、情報ネットワーク、マルチメディア・ネットワーク、EDI、インターネット、VAN、スモールe、B2B、B2C、技術革新、ニュー・メディア、FA・OA、経営戦略、ビジネスモデル特許、などである。

著者より



ミネルヴァ書房
3,150円(税込)

ローカル・ガバメント論 — 地方行政のルネサンス —

まへはらし
真山達志(大学政策学部教授) 編著

地方分権の推進が政治的、社会的課題として表面化して既に20年近くになる。この間、地方分権が金科玉条の如く扱われるようになってしまった。その結果、地方分権にも「良い地方分権」と「悪い地方分権」があるはずだが、地方分権や地方自治の実態の検討が十分に行われていない。本書は、多くの人が意図的か無意識かはともかく議論や研究を避けてきた厄介な論点について、学術的な検討を挑んだ意欲作であると自負している。その主な論点は以下の通りである。

第一は、自治は自治能力のあ

る主体が担わないと結果として独裁や衆愚政治に陥る危険があるが、自治体や住民は自治の担い手として十分な資質・能力を有しているのかについての検討である。第二は、地方分権と並行して進められている行政の民間化の動きについての検討である。今の行政が理想的というわけではないが、民間が公共の担い手として行政より常に優れている訳でもないという前提での検討を行っている。そして第三は、そもそも自治体行政はどのような役割や機能を果たすべきなのかの検討である。東日本大震災後の現実を見ても判るように、行政に対する期待と依存は大きいのが現実である。

昨今、ガバナンス論の名の下に、自治体行政の検討が蔑ろになっている。それどころか、行政の否定ともいえる論調も少なくない。それゆえ、あえて地方行政に焦点を合わせた「ローカル・ガバメント論」を展開したのである。

著者より



メディアファクトリー
1,260円(税込)

「抗糖化」で何歳からでも美肌は甦る

まいいとしず
米井嘉一(大学生命医科学部教授) 著

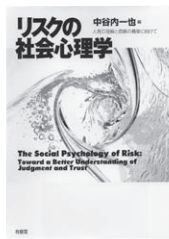
私は生命医科学部で抗加齢医学研究室を主催し、研究教育に従事しています。研究面ではアンチエイジングリサーチセンターと糖化ストレス研究センターの二つの寄付講座を併設しています。抗加齢医学(アンチエイジング医学)の目標は「健康長寿の達成」ですが、そのためには身体の内側も外側(見かけ)も健康である必要があります。これを妨害する大きな勢力が「糖化」。これは身体のタンパク質が糖やアルデヒドと反応して老化物質ができてしまう現象です。私たちは数年前から身体の

「糖化」に注目し研究を重ねてきました。まだまだ馴染みがない言葉です。できるだけ多くの皆様に「糖化」の仕組みを知ってもらい、「抗糖化」で健康増進に役立ててもらいたいと思いました。そして、わかりやすくするため、肌の若返り法として「抗糖化」を説明することにしたのです。

例えば「糖化は老化である」というシンプルなメッセージ。肌の黄ばみは糖化(＝老化)のサインです。若くて健康な肌(＝美肌)は「抗糖化」を知らなければ実現しません。肌に良いことを実践すると、身体の中身も健康になります。本書はこの考えを一般読者に分かりやすくイラスト入りで解説。糖化しない身体になる方法を詳しく伝授しています。

「抗糖化」は化粧品や美容業界の商品に取り入れられはじめています。お陰様で、人気の化粧品業界にも卒業生を送り出すことができました。学生の就職活動にも貢献しているのです。

著者より



有斐閣
3,150円(税込)

リスクの社会心理学

人間の理解と信頼の構築に向けて

中谷内一也 著
中谷内一也 著

われわれの社会はさまざまなリスクを抱えている。リスクが現実の災害へと具現化した際に、命を落とす人を少しでも減らすうとするならば、社会と、その社会を構成する人のところ——りわけリスクに関する認知・意思決定や感情など——を理解することが必要である。このことを強く痛感させられたのが、東日本大震災での津波被害であった。津波が襲ってきたのは地震発生から数十分後のことである。つまり、地震直後から高台を目指して大急ぎで避難していれば助かったはずの命が多くあつたと

いうことである。この事実が社会心理学に対して処方を示すべき問題突きつけている。他にも、例えば、感染症の拡大を抑えるには、人の行動パターンや感染からの防護行動が何によって動機づけられるかを理解する必要がある。交通事故を減少させるにはドライバーや自転車利用者、歩行者の心理学的な理解が必要になる。今日、食のリスクから放射線リスクに至るまで、人の心について理解することなしに対処可能なリスク問題は多いといつてよい。社会心理学はそういった問題群にアプローチし、社会の無念を減少させることにもつと貢献すべきだし、貢献できる知見を備えていると思う。その知見の基礎的な部分を整理しようと試みたのが本書である。

人の命を救うための社会科学・行動科学がいつそう盛んになることを、また、本書がその一助となることを願っている。

著者より



筑摩書房
903円(税込)

イスラームから世界を見る

内藤正典 著

本書は、いま中東・イスラーム世界で起きている事件や紛争の背景にあるイスラーム的な思考について平易に説き起こすことを目標に書いた。2011年以来、アラブ諸国では所謂「アラブの春」と呼ばれる民主化運動が連鎖的に起きた。チュニジアやエジプトでは独裁政権を打倒した後、イスラーム主義政党が台頭した。これをもって、欧米からは「アラブの春がイスラーム主義者にハイジャックされた」という主張が出ている。しかし、多数をムスリムが占める社会で民意を反映させれば、イ

スラーム的倫理やイスラーム法の施行を求める声がでてくるのは当然である。イスラーム世界に対して、私たちは、とくく自分たちの価値観に沿うもの、見たいものだけを見る傾向がある。それを続けていては、いつまでたってもイスラームとその信徒であるムスリムの実像に迫ることはできない。本書が目指したのは、ある事柄について価値を共有し得ても、別の事柄では非ムスリムとムスリムとが価値を共有できないことを明らかにすることである。ただし、同じ価値観を持ってないとしても、世界に15億とも16億ともいわれるムスリムとの共存は、実現しなくてはならない。9・11以来の西欧とイスラーム世界との厳しい関係、とりわけ衝突や戦争を繰り返す事態を回避するためには何が必要なのか——この問いに簡単に答えることは難しいが、読者からの批判をふくめて、さらに追究していきたいと考えている。

著者より



成文堂
5,040円(税込)

裁判員裁判の理論と実践

杉田宗久 著

裁判員制度が始まってから早くも3年半を経過した。この間、裁判員制度は国民の間にもすっかり定着し、施行前に懸念されていた数々の難題も概ね克服してきたように思われる。平成24年3月まで30年にわたり裁判官をしていた著者も、裁判官生活最後の9年間は裁判員制度に深く関わることとなった。制度施行前はその準備活動に種々携わる一方、施行後は、大阪地方裁判所の裁判長として数多くの裁判員裁判に関与することとなった。本書は、この間著者が裁判員制度に関連して著した10編の論文をまとめて一書の形にした

ものである。

裁判員制度法が国会で成立して以来、この制度が歩んできた道は決して平坦なものではなかった。本書に収められた論文の多くも、著者が、裁判員制度を取り巻く数多ある問題の数々に関し同僚法曹や刑法研究者らと交わした熱い議論を踏まえながらも、やはり裁判実務家らしく、実務の実践の中で、自ら考え、悩み、工夫を重ねつつ、更にその理論的検討を行ったり、これをまた実践に反映したりという繰り返しを行う中から生まれ出てきたものである(本書を『理論と実践』と名付けたのもそれ故のことであった)。最後に、ある研究者の寸評を引用して本書の紹介に代える。(本書は、合意書面の活用、手続二分論的運用、対質尋問の活用等、裁判実務の第一線に立つと同時に法曹三者や研究者との議論も積極的に進めてきた筆者ならではの問題提起に富む。)豊崎七絵、学

著者より



日本生活協同組合連合会出版部
2,100円(税込)

大学の協同を紡ぐ

京都の大学生協

名和又介 著
名和又介 著

同志社大学の誇るべきものはいくつかある。その一つが大学生協の設立である。日本で初めての大学生協は同志社大学に始まる。1898年に阿部磯雄により設立された。現金主義のため1年足らずで破綻している。地域生活協同組合の設立は遅れて1920年代であり、現在のコープこうべなどがその例になる。賀川豊彦は、米騒動で逮捕された庶民などを励まし貧しい者たちが生き延びける方法を協同組合に求めたのである。

戦後、学徒援護会から出発した大学生協はやがて整理され、学生生協として再興の努力が続けられた。京都では京都大学生協に次いで、1953年に同志

社大学生協がスタートする。初代理事長は、嶋田啓一郎である。父の友人賀川豊彦の勧めで、同志社大学に進学し、社会事業を専攻した一期生である。後輩の駒井四朗は同志社大学の職員としてその設立をサポートした(後、総務部長・宗教部長を経て、退職後京都精華大学理事長になる)。賀川豊彦の勧めで同志社大学に学んだ横関武が、コープこうべから同志社大学生協の初代専務として赴任した。嶋田啓一郎は経済・福祉を専門として多くの著述を残し、大学生協の全国連合会が設立されると初代会長も務めた。

大学生協史に輝く同志社大学生協の歴史とその歩みを研究したものが、『大学の協同を紡ぐ』である。研究編は人文科学研究所の「社会科」に掲載された論文を中心に取り上げ、証言編は大学生協で活躍した生協人の回想などをまとめている。2012年は国際協同組合年にあたり、世界の協同組合の中でも珍しい存在である大学生協にかかわる研究書を発行することができた。お世話になった方々に感謝したい。

名和又介



昭和堂
2,415円(税込)

大学的京都ガイド —こだわりの歩き方—

同志社大学京都観学研究会編
2006年度に、大学に集積された「知」と旅行会社が集積された「観光ノウハウ」とを結びつけることで、京都における新たな観光事業の創造を目的として、同志社大学とJT B西日本とが「楽洛キャンパス」という産学連携事業を立ち上げました。さらに、この事業の推進主体として、2007年度から、同志社大学寄付教育研究プロジェクトとして「京都観学研究会」を設置し、参加メンバーからのプレゼンテーションや研究発表なども行いながら、コンテンツの集積に努めてきました。
こうしたコンテンツを講座と

いう形で社会化するとともに、出版物を通してそのユニークさと楽しさを知らせたいという思いから、今回われわれとともに「楽洛キャンパス」を盛り上げていただいた先先生方にも参加いただき、「観光」と「学び」の融合の取り組みを世に問うことになりました。

京都の大きな魅力のひとつとは、一二〇〇年を超える日本の歴史と文化が今も身近なものであるとして息づいている点にあります。そこで本書では、一般のガイドブックには紹介されていない、隠れた京都の魅力や、見過ごされがちだが大切な京都の歴史と文化について、「古写真」や「古地図」に導かれた現在と過去の連携を意識し、紹介のポイントとしました。京都の魅力に惹かれ、京都を愛し、京都を楽しむ多くの人々に対し、この本が京都観光のよきガイド本「道しるべ」となることを切に祈念します。

西村卓(大学経済学部教授)
西村俊夫(大学文化情報学部教授)



見洋書房
2,415円(税込)

自由の探求

川島秀一(大学名誉教授) 著

本書は、カントに見ることのできるヨーロッパ的思維の限界内における自由を超える根源的自由を、日本の仏教文化の核心をなす自在思想に探りつつ、波多野精一の宗教哲学における愛の人格主義によつて継承しようとする試みである。

まず第一章では、カントの選択意志の自由が道德的世界内存在としての人間における実存の自由に深められること、現実の生世界をめぐる自由ゆえの争いは、自由の主体としての人格同志士の対話を通じて、現実的理想の道德的世界が永遠の理想の道德的世界に合目的に調和する世界として普遍的に承認される

という仕方では解決可能となることとが究明されている。

第二章では、自在思想を「聖道」から「浄」「禪」へと辿つて考察することを通じて、仏凡の異質的な対立を克服して真の一如に流動化する世界において対象を包括しつつ世界をその都度創造する創造的抱擁の個性であることが論じられている。

続く第三章では、象徴的内在としての啓示概念を介すること、自在の抱擁の精神が大乗の慈悲の倫理となり、波多野のカント理解に見出される愛の人格主義として自覚的に継承されうることの明快な道筋が示されている。

この自由から自在を経て、他者に抛り他者のために献身する愛の倫理へと結晶する哲学的思索は、著者の言う「自由の深淵のうちに潜むニヒリズム」克服のための確かな道標となるであろう。

中川明才(大学文学部准教授)



明書房
1,680円(税込)

なるほど新島襄

伊藤彌彦(大学名誉教授) 著

歴史の教科書を読んで「なるほど!」と思う人は、どのくらいいるだろうか。記憶すべき歴史叙述は重要であるが、正統な語りには退屈させられることもある。しかし、少し角度を変えて出来事の内実に触れると、その新鮮な再発見が歴史認識そのものを変えてくれる場合がある。本書は、新島襄について、そのような読み直しを促し、「なるほど!」という新鮮な驚きを吹き込んでくれる一書である。

本書は、新島襄についての体系的な語りではない。新島と彼が生きた世界に対し多面的にアプローチする80篇のエッセイが

らなっている。各篇は見開き一頁に収められ、気楽に読み進めることができるようになっているが、いずれのエッセイも鋭い切り口と堅実な歴史分析を含んでいる。

本書がこうした構成を持っているのは、これらのエッセイが同志社大学の「チャペルアワー案内」に14年間にわたって連載されてきたものであることによる。著者が連載を始めることになったいきさつについては本書「あとがき」に記されているので、それをご覧いただきたい。いずれにせよ、私はこの連載を毎回楽しみに読んできた熱烈な読者の一人であった。読むたびに、新島が生きた時代、彼を取り巻く人物たち、そして新島がなした挑戦に思いをはせ、時代を超えた対話を促されてきた。こうした貴重な労作が一冊にまとめられ、より多くの読者に共有されることを喜ぶ次第である。

小原克博(大学神学部教授)

『同志社時報』ご講読について

多くの皆さんにご愛読いただくために、118号(2004年10月発行)から購読料が無料になりました。送料(1冊につき切手200円)のみのご負担で定期講読いただけます。

●定期送付のお申し込み●

『同志社時報』は、4月、10月の年2回発行しています。巻末はがき、電話、FAXまたはe-mailで大学広報課までご連絡ください。ご連絡をいただき次第、「申込み用紙」を送付いたします。「申込み用紙」到着後、必要事項をご記入いただきご希望号までの送料(切手)を添えてお申し込みください。

●バックナンバーのお申し込み

下記まで必要経費分(購読料+送料)の切手を添えてお申し込みください。
〈購読料〉 1号~51号 100円 52号~78号 150円 79号~117号 200円 118号~ 無料
〈在庫切れ〉 29号、52号、54号、79号、91号、95号、119号、123号
〈送料〉 1冊につき200円

●ご意見・ご感想をお聞かせください

巻末のはがき、お手紙、eメール等でお寄せください。

同志社大学広報課 同志社時報係

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
電話 075(251)3120 FAX 075(251)3080
e-mail: ji-koho@mail.doshisha.ac.jp